

クラブ員一人ひとりが自覚をもって、意欲的に 農業クラブ活動に取り組むためにはどのようにしていくべきか

クラブ員代表者会議 関東ブロック 茨城県立水戸農業高等学校
園芸科 3年 横江 藍
園芸科 3年 大和田まゆあ
園芸科 3年 中嶋 萌葉

1 はじめに

関東ブロック学校農業クラブ連盟は、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、山梨、静岡の1都8県で構成されています。その中で、私たちの住む茨城県は、農業産出額全国3位の実績を誇り、豊かな自然と温暖な気候に恵まれ、農業がさかんな産業の地域です。県内には7つの農業関係高校があり、水戸農業高等学校は唯一の農業単独校として、茨城県の農業教育の中心になっています。

水戸農業高校ってどんな学校？

1. 歴史がある

明治28年に開校し、今年に創立127周年を迎えます。

2. 広大な敷地

敷地面積は約48ha。

ディズニーシーとだいたい同じ面積です。

3. 農業のあらゆる分野に対応

全日制課程7学科（農業・畜産・園芸・生活科学・農業土木・食品化学・農業経済）昼間定時制1学科（農業）の合計8学科があります。

4. 生徒数全国トップクラス

生徒数は約900名が在籍しています。

その他、紹介しきれませんが、農業教育の“スーパーハイスクール”として、世界で活躍できる、未来の農業経営者、農業関連技術者、農業系大学進学者の育成を目指しています。

5. 農業クラブ活動について

本校での農業クラブ活動はとても活発に行われています。

プロジェクト発表会では、部活動も積極的に研究発表を行っており、私たちの活動も「農業研究部」が母体です。

継続プロジェクトが多く、全国的にも珍しい「カカオ」を題材にした研究も注目されています。

本校の県大会の実績は、プロジェクト発表会、意見発表会で、ほとんどの分野が関東大会出場を果たしています。農業鑑定競技でもほとんどの分野で最優秀選手を輩出。家畜審査競技会、平板測量競技会、ワープロ競技会においても県下トップの成績を取っています。



水戸農業高等学校



農業実習の風景

2 私たちのつくる未来のカタチ ～ストロベリー生パスタの活動について～

みなさん、日本ではどのくらい食品を捨てているか、知っていますか？

私たちは、SDGsを学ぶなかで、日本の食品ロスが年間約612万トン（平成30年度推計値／農林水産省食料産業局）もあることを知り、驚きました。世界では、貧困や飢餓に苦しむ人が多くいる一方で、わが国ではこれだけの量が廃棄されています。この食品ロスの問題は、SDGs開発目標にも掲げられ、世界全体で取り組むべき、課題になっています。



この数字には、規格外を理由に廃棄された野菜が含まれていません。一生懸命栽培したのに、店頭にも並ぶこともなく、過熟、傷、見た目によって廃棄されてしまう、野菜は「畑の食品ロス」とも言われています。これらを有効活用することこそ、農業を学び、実際に野菜を育てている、私たち農業高校生にしかできない活動だと確信し、仲間と共に立ち上がりました。



活動のきっかけは、地元のイチゴ農家で研修したことでした。イチゴはケーキなどの高級洋菓子に多く用いられます。そのため、味は変わらないのに見た目が悪いという理由で、最盛期には、一日あたり平均50キロものイチゴが捨てられていました。そこで私たちは、このイチゴの廃棄をなくすための活動を、取り組みの第一歩とすることにしました。



まず、廃棄イチゴを活用するため、イチゴの嗜好性、季節性を考慮し、商品開発をスタート。試作を重ねた末、多くの人に手に取ってもらいたいとの思いから、アレンジしやすく、汎用性の高い、生パスタに決定しました。

製作には、地元のイタリアンレストランに協力を依頼し、特別レシピを考案しました。イチゴを練りこんだ「ストロベリー生パスタ」が完成しました。出来上がったパスタはイチゴの甘い香りが最大の特徴です。種のプチプチ感も楽しんでいただける、満足のいく商品となっています。「お菓子みたいに甘いのかな？」と思うかもしれませんが、ご安心ください。きちんとお食事として召し上がっていただけます。クリーム系のソースとあわせていただくのが、一番風味を感じられると思います。



パッケージもアイデアを出し合い、イチゴのかわいらしさが伝わるデザインにしました。贈答用としてもピッタリで、30、40代の女性のお客様をメインターゲットにしています。形状もロングパスタ（スパゲティ・タリアテッレ）の他、ショートパスタ（フジッリ・コンキリエ）など、お客様のニーズに合わせて、選んでいただけるようにしています。



完成生パスタ

さっそく、生産者と消費者が直接つながる場であり、効率的に商品の認知拡大が望める、地元のマルシェで販売を開始。さらにブランド価値を高めるために、地元の百貨店でも販売。一週間で1200食を完売することができました。「畑の食品ロス」を知ってもらうための広報活動として、購入者には「サンキューカード」や手作りのリーフレットを配布しました。購入者からはSNSを中心に、写真やレシピの提供があり、「#イチゴパスタ食べました」というハッシュタグのもと、幅広い世代の方々と交流をすることができました。



百貨店での販売会

活動を継続するうえで、もっとも大切なことは、経済的に自立した循環型の活動にしていくことだと思います。このような活動は、ややもすると携わる人の善意に頼りがちです。しかし、携わる人すべてが幸せになる自立した活動にすることで、「食品ロス」の削減につなげていきたいと考え、収支を計算しました。



リーフレット

販売価格200円の生パスタの材料費は、廃棄イチゴを市場価格の4分の1で購入したと想定すると41円。それにパッケージ代や人件費などを加え、昨年度の売り上げ実績をもとに算出した結果、約87万円の利益となり、また農家の所得が57万円アップし、生産者、加工業者、小売業者、携わるすべての人が「幸せ」になることを証明することができました。



#イチゴ生パスタたべました



マルシェでの販売会

私たちは農福連携にも注目しました。イチゴの収穫・調整作業には熟練した技術が必要ですが、廃棄イチゴは無選別に収穫することが可能であり、生パスタの材料となるペーストづくりもシンプルな工程です。そのため、障害を持った方でも従事することが可能だと考え、近隣の障がい者支援施設の協力を依頼しました。収穫やペーストづくりに協力していただきました。ペーストづくりについては、オペレーションに改善の余地があるものの、就労支援と賃金の支払いが可能だとわかり、農福連携の推進に貢献できると確信しました。



障がい者支援施設との交流会

また、廃棄イチゴの収穫は時間帯を選ばず、短期間でも可能なため、すきま時間の有効活用や、多様な働き方につながる可能性も見えてきました。

3 小さな活動が大きな一歩になることを信じて……

私たちの産官学連携事業は、多くの人の支えがあり、認知が進んでいます。捨てられてしまうイチゴを見て「もったいない」から始まった、私たちの活動は、地域創生、経済と環境の好循環を創出することができました。イチゴの生パスタがみんなを幸せにする一歩となったのです。

私たち一人一人の声はとても小さいのですが、自分の思いを言葉にして伝えて、できることから始めることが大切だと思います。それが、クラブ員一人ひとりが自覚をもって、意欲的に農業クラブ活動に取り組むためにはどのようにしていくべきか、という問いかけの答えだと思います。

私たちは「どうせ言っても変わらないのだから……」と何もしないことがよくあります。傍観しているだけでは、何も変わりません。発言することを、恥ずかしがったり、恐れたりせずに、自分の意見を言葉にして、クラブ員一人一人が活動することが、農業クラブの活動の発展に繋がっていくと思います。



私たちのつくる未来のカタチ

はじめまして！！

私たちは、茨城県立水戸農業高等学校「農業研究部」です。通称 のうけんぶ (NKB) です！

ホームページ



私たちのつくる未来のカタチ
私たちの活動を
農業研究部のツイッターやインスタグラムで
ぜひご覧ください



MITO_AH_NKB

